

『無敵の人因子（Invincible Person Factor）』の構造と力学：心理的・社会的・進化的メカニズムに関する包括的学術報告書

序論：現代社会における「無敵」のパラドックス

現代の犯罪社会学および心理学において、「無敵の人（Muteki no Hito）」という概念は、単なるインターネットスラングの域を超え、極めて深刻かつ特異な犯罪類型を説明する重要な社会学的用語として定着しつつある。2008年にひろゆき（西村博之）によって提唱されたこの言葉は、社会的信用、雇用、資産、人間関係といった「失うべきもの」を一切持たないがゆえに、既存の法秩序や社会的制裁（逮捕、投獄、社会的抹殺）が抑止力として機能しない人々を指す¹。

伝統的な近代刑法および社会契約説は、個人が「自由」や「財産」、「社会的地位」を保持しており、それらを剥奪されることへの恐怖が犯罪抑止の根幹を成すという前提に基づいている。しかし、「無敵の人」はこの前提を根本から覆す存在である。彼らにとって、社会的な地位や人間関係は既に失われているか、あるいは最初から獲得できていない「負の遺産」であり、逮捕や投獄は現状からの「変化」あるいは「衣食住の保障」としてすら機能しうる²。

本報告書は、この「無敵の人因子」について、社会学的統制理論、緊張理論、行動経済学（プロスペクト理論）、そして進化心理学（クレイジー・バスタード仮説、若年男性症候群）の多角的な視点からその発生メカニズムを学術的に解剖し、なぜ彼らが「自暴自棄」を超えた「破滅的攻撃」へと至るのかを体系的に論じるものである。特に、日本社会における「就職氷河期世代」の孤立や、相対的剥奪感がもたらすルサンチマン（怨恨）の役割に焦点を当て、自殺から他殺（拡大自殺）への転換点を詳らかにする。

第1部：社会的排除と統制理論の崩壊

「無敵の人」の発生を理解する上で、まず検討すべきは、彼らを社会規範に繋ぎ止めている「絆」の断絶である。なぜ彼らは社会のルールを遵守する必要性を感じなくなるのか。ここではトラヴィス・ハーンシの社会的絆理論を中心に分析を行う。

1.1 ハーンシの社会的絆理論（Social Bond Theory）による分析

犯罪社会学者のトラヴィス・ハーンシは、1969年の著書『非行の原因（Causes of Delinquency）』において、人は本来、逸脱行動をとる可能性を秘めているが、社会との「絆（Bond）」によってそれを抑制されていると論じた³。この絆が弱体化あるいは断絶した時、人は「自由に」犯罪を行える状態になる。ハーンシが提唱した4つの要素——愛着（Attachment）、コミットメント（Commitment）、巻き込み（Involvement）、信念（Belief）——は、「無敵の人」にお

いて体系的に崩壊していることが確認できる⁵。

1.1.1 愛着（Attachment）の欠如と他者への無関心

「愛着」とは、両親、友人、教師など、重要な他者の期待や感情に対する配慮を指す。人は「親を悲しませたくない」「友人に軽蔑されたくない」という感情的ブレーキによって逸脱を回避する⁵。しかし、「無敵の人」の多くは、長期間の社会的孤立（引きこもり）や家族関係の断絶を経験しており、この「心理的な他者」が存在しない状態にある⁶。

特に、日本における「8050問題」（80代の親が50代の引きこもりの子を支える構図）に見られるように、家族という最後の砦さえもが機能不全に陥った時、個人は完全な孤立状態に置かれる。他者との情緒的な繋がりが希薄化することで、他者への共感性（Empathy）が著しく低下し、他者を「人間」としてではなく、自己のフラストレーションを解消するための「対象物」や「社会の象徴」として認識する心理的土壌が形成される⁷。

1.1.2 コミットメント（Commitment）の喪失と「失うもののなさ」

「コミットメント」は、学業、職業上の地位、蓄積された財産など、社会的な投資を指す。これらは「順応への投資（Stake in Conformity）」と呼ばれ、犯罪によってこれらを失うリスク（コスト）が抑止力となる⁸。

「無敵の人」の核心的定義である「失うものがない」状態とは、まさにこのコミットメントの欠如を指す。就職氷河期世代における非正規雇用の常態化や、長期失業によるキャリアの断絶は、彼らから「守るべき将来」を奪った¹。刑務所内での不品行研究においても、仮釈放の可能性がない（失うものがない）受刑者は、リスクを顧みず暴力行為に及ぶ傾向が高いことが示されており⁸、この力学が一般社会における「無敵の人」にも適用される。彼らにとって、現状維持は「緩やかな死」であり、犯罪によるリスク（逮捕、刑罰）は、ゼロあるいはマイナスの資産しか持たない現状と比較して、実質的なコストとして認識されないのである。

社会的絆の要素	定義	「無敵の人」における状態	行動への影響
愛着 (Attachment)	他者への情緒的配慮	孤立、家族不和、友人の欠如	他者への共感性の欠如、被害者の記号化
コミットメント (Commitment)	社会的地位・資産への投資	失業、非正規雇用、無資産	逮捕・投獄による損失コストの消滅
巻き込み (Involvement)	慣習的活動への従事	余暇の過多、ネットへの没入	逸脱的空想を醸成する時間の増大
信念 (Belief)	社会規範の正当性への同意	「自己責任論」への反発、敵意	法遵守義務の否認、社会への復讐の正当化

1.1.3 巻き込み (Involvement) と信念 (Belief) の変質

「巻き込み」は、学業や仕事などの慣習的な活動に忙殺されている状態を指し、逸脱行動を考える暇を与えない機能を持つ⁵。しかし、失業や引きこもり状態にある「無敵の人」は、膨大な「空白の時間」を抱えている。現代においてこの空白は、しばしばインターネット上のエコーチェンバー（同調的な意見が増幅される閉鎖空間）によって埋められる。そこで彼らは、自身の境遇を社会の不正義として再解釈する独自のナラティブを構築し、既存の社会規範（法律や道徳）の正当性を否定する「信念」を形成していく⁶。

第2部：緊張理論とルサンチマンの構造

社会的絆の欠如は、犯罪を「可能」にする条件であっても、必ずしも犯罪を「動機づける」ものではない。なぜ彼らは単なる離脱ではなく、暴力的な攻撃を選択するのか。これを説明するのが、ロバート・アグニューの一般緊張理論（General Strain Theory: GST）およびマートン、コーエンらによるアノミー理論である。

2.1 一般緊張理論 (GST) と是正行動としての暴力

アグニューのGSTによれば、人は「緊張 (Strain)」を感じた際に、その不快な感情（怒り、フラストレーション、絶望）を解消しようとして逸脱行動に走る¹⁰。緊張の源泉は主に以下の3つに分類される。

1. **肯定的に評価される目標の達成失敗**：経済的成功、社会的地位、配偶者の獲得など、文化的に推奨される目標に手が届かない状態。
2. **肯定的刺激の除去**：親の死、恋人との離別、あるいは「居場所」の喪失。秋葉原無差別殺傷事件の加藤智大死刑囚の場合、自身の精神的支柱であったインターネット掲示板の「荒らし」行為による居場所の喪失が、犯行の直接的なトリガーとなったとされる¹。
3. **否定的刺激の提示**：虐待、いじめ、社会的な侮蔑や差別。

「無敵の人」にとって、これらの緊張は一過性のものではなく、慢性的かつ構造的なものである。特に「就職氷河期」や「非正規雇用」という構造的な障壁によって、努力しても報われない（目標達成の手段が閉ざされている）状態が長期化すると、その緊張は「怒り」へと転化する¹⁰。

GSTにおいて重要なのは、犯罪が「緊張を緩和するための是正行動 (Corrective Action)」として機能する点である。彼らにとって無差別殺傷や放火といった凶行は、自身の存在を無視し続ける社会に対する「復讐」であると同時に、圧倒的な無力感（緊張）を一挙に解消し、自身の存在証明（自己効力感の回復）を果たすための「合理的」な手段として選択される¹⁰。

2.2 相対的剥奪感 (Relative Deprivation) とルサンチマン

絶対的な貧困よりも、他者との比較において生じる「相対的剥奪感」の方が、犯罪との相関が強いことは多くの研究で示されている¹²。現代の高度情報化社会、特にSNSの普及は、他者の「成功」や「幸福」を可視化し、持たざる者の剥奪感を極限まで増幅させる装置として機能し

ている。

「格差社会」と羨望の変質

社会学者のJock Youngらが指摘するように、相対的剥奪感は「不当な欠乏」の感覚を伴う¹⁴。自身が社会の底辺にいること自体（絶対的剥奪）よりも、「自分と同じような人間が成功しているのに、なぜ自分だけが」「不当な社会構造のせいで自分は割を食っている」という認識が、強烈なルサンチマン（Ressentiment：弱者の強者に対する恨み）を醸成する。

ニーチェやシェーラーが論じたように、ルサンチマンは単なる嫉妬ではなく、価値観の転倒を伴う¹⁵。初期段階では「成功者になりたい」という憧れ（同一化願望）が存在するが、それが達成不可能であると悟った時、対象への憎悪へと反転する。「幸福そうな女性」や「エリートサラリーマン」、「楽しそうな家族連れ」といった、社会的に「善」とされる幸福の象徴が、彼らにとっては自身の不幸を際立たせる「悪」として認識され、攻撃の正当なターゲットとなるのである¹。これは、小田急線刺傷事件の犯人が「幸せそうな女性」を標的にした心理メカニズムと合致する。

第3部：絶望の経済学とプロスペクト理論

「無敵の人」の行動は、しばしば「自暴自棄」や「狂気」として片付けられがちであるが、行動経済学の視点、特にカーネマンとトベルスキーによる「プロスペクト理論（Prospect Theory）」を用いることで、その意思決定プロセスを「歪んだ合理性」として説明することが可能である。

3.1 損失領域におけるリスク愛好的行動

プロスペクト理論の核となる知見は、人間の意思決定が参照点（Reference Point）に依存し、利得領域と損失領域でリスクに対する態度が反転するというものである¹⁶。

- **利得領域（Gain Domain）**：人は利益を得ている時、その利益を確保しようとしてリスク回避的になる（確実な利益を好む）。
- **損失領域（Loss Domain）**：人は損失を被っている時、その損失を取り戻そうとして**リスク愛好的（Risk Seeking）**になる（確実な損失よりも、一発逆転の可能性に賭ける）。

「無敵の人」の心理的参照点は「人並みの生活（結婚、定職、友人関係）」に置かれていることが多い。しかし、現実の彼らの状態は、この参照点から遥かに隔たった深い「損失領域」にある¹⁸。彼らは、現状を維持すること自体を「確実な損失（Sure Loss）」——孤独死、貧困、無意味な人生の継続——として認識している。

この状況下において、通常の社会人が恐れる「逮捕」や「死刑」といったリスクは、彼らにとっての損失をこれ以上大きく増大させるものではない（限界効用の逓減）。むしろ、凶行に及ぶことは、極めて低い確率ではあるが「世間の注目を浴びる」「社会に一矢報いる」「自分の苦しみを理解させる」という、現状の「確実な負け」を覆す唯一のギャンブルとして機能する²⁰。

価値関数 (Value Function) の凸性

損失領域における価値関数 $v(x)$ は凸状 (Convex) であり、損失が大きくなればなるほど、追加的な損失に対する感度 (痛み) は鈍化する²¹。

- **一般市民**：犯罪を犯せば、現在の生活 (ゼロ地点) からマイナス (逮捕、失職) へ転落する。この痛みは激しいため、犯罪は抑止される。
- **無敵の人**：既にマイナス100の地点にいる。犯罪によってマイナス120 (死刑や無期懲役) になったとしても、その差分 (-20) の心理的苦痛は微々たるものである。むしろ、行動を起こすことで得られる心理的報酬 (自己効力感、復讐の達成感) がそのコストを上回ると計算される²²。

3.2 絶望の閾値モデル (Desperation Threshold Model)

近年の進化ゲーム理論や行動生態学の研究は、「絶望の閾値 (Desperation Threshold)」という概念を提示している²³。これは、個体の保有リソースがある閾値を下回り、生存や繁殖の可能性が著しく低下した (基本的ニーズを満たせなくなった) 時点を目指す。

この閾値を下回った個体 (Desperado) にとって、ルールを守る協調行動は「確実な死 (遺伝的淘汰)」を意味する。したがって、彼らは「全てを奪う (搾取する)」か「暴れる」というハイリスク・ハイリターンな戦略、あるいは「破壊的」な戦略を採用することが、進化的にも合理的となる²⁵。

現代社会において、経済的な困窮だけでなく、社会的孤立や承認の欠如がこの「閾値」を構成する。閾値を割った「無敵の人」にとって、社会契約を守ることは自滅と同義であり、したがって彼らは最も激しい「裏切り (Defection)」——すなわち無差別な暴力——を選択するのである。

第4部：進化心理学的アプローチとシグナリング

なぜ「無敵の人」による事件の加害者は圧倒的に男性が多いのか。そしてなぜ、その暴力はしばしば過剰で演劇的 (劇場型) なのか。進化心理学は、これらの問いに対して生物学的な基盤を提供する。

4.1 若年男性症候群 (Young Male Syndrome)

ウィルソンとデイリーが提唱した「若年男性症候群」は、若い男性が他の性・年齢層に比べてリスクテイクや攻撃的行動に走りやすい傾向を進化的に説明するものである²⁷。

進化史において、哺乳類のオスはメスに比べて繁殖成功度の分散 (Variance) が大きい。つまり、「勝者」は多数の子孫を残せる一方、「敗者」は子孫を全く残せない (遺伝的死) という過酷な競争に晒されてきた。このため、オスは社会的地位やリソース獲得に失敗した際、リスクを顧みず、暴力を含む極端な手段を用いてでも現状を打破しようとする心理メカニズムを進化させてきた³⁰。

現代の「無敵の人」の多くは、配偶者獲得競争 (経済力や社会的地位) において敗北したと感じている男性である。彼らの暴力は、生物学的にプログラムされた「敗者復活」のための、あるいは敗北による屈辱を払拭するための、暴走した適応戦略と解釈できる³¹。

4.2 クレイジー・バスタード仮説（Crazy Bastard Hypothesis）と脅威の誇示

フェスラーらが提唱した「クレイジー・バスタード仮説」は、一見無意味に見えるリスク行動が、他者に対する「手強さ（Formidability）」のシグナルとして機能すると論じる²³。

「自分の命すら惜しくない」という態度は、対立者に対して「こいつと関わると大きなコストを払わされる」という強力な威嚇となる。通常、社会的地位の低い個体は軽んじられる傾向にあるが、死をも恐れぬ予測不能な行動（Crazy Bastard行動）をとることで、周囲に恐怖を与え、擬似的に「優位な存在」「無視できない存在」として振る舞うことが可能になる²³。

無差別殺傷事件における犯人の行動は、社会的に不可視化（透明化）された存在であった彼らが、最大級の暴力というシグナルを発信することで、社会に対して自身の「手強さ」と「存在」を強制的に認知させる行為であると言える。

4.3 資源保持能力（RHP）と「スパイト（Spite）」行動

動物行動学におけるRHP（Resource Holding Potential：資源保持能力）の概念では、通常、RHPの低い個体は高い個体との闘争を避ける。しかし、「無敵の人」は圧倒的に巨大なRHPを持つ相手（国家、大企業、社会全体）に対して攻撃を仕掛ける³⁴。

これは「スパイト（意地悪、悪意）」と呼ばれる行動類型に合致する。スパイトとは、「自らがコストを払ってでも、他者の利益を損なわせる」行動である³⁶。彼らは自らが利益を得ること（勝利）を目的としているのではなく、自分を受け入れなかった社会（勝者たち）に損害を与えること自体を目的関数としている。これは、自身の利得がマイナスであっても、相手の利得を大きく引き下げることで、相対的な格差を縮小しようとする（あるいは単に相手を引きずり下ろす）進化的心理の発露である³⁷。

第5部：心理的メカニズムと「拡大自殺」

社会学的・進化的背景の上で、個人の内面ではどのような心理的変容が起きているのか。ここでは、マイケル・キメルらが提唱する「剥奪された特権意識（Aggrieved Entitlement）」と、自殺の変種としての他殺について論じる。

5.1 剥奪された特権意識（Aggrieved Entitlement）

「剥奪された特権意識」とは、自身が本来享受すべきであると信じている特権（正社員としての地位、温かい家庭、男性としての尊厳など）が、不当に奪われたと感じることから生じる激しい怒りである³⁸。

キメルは、特に白人男性による乱射事件やドメスティック・バイオレンスの背景にこの心理を見出したが、これは日本の「無敵の人」にも強く当てはまる。「真面目に生きてきたのに報われない」「自分より劣る（と彼らがみなす）人間が優遇されている」という認知の歪みは、自身を「加害者」ではなく「被害者」として定義づける。

この被害者意識（Victimhood）は、暴力を正当化する強力なイデオロギーとなる。「社会が自分を不当に扱ったのだから、社会に対して何をしても許される（あるいは社会が報いを受けるのは当然だ）」という論理である。安倍晋三元首相銃撃事件の山上徹也被告も、自身の人生が

統一教会（及びそれを支持したと彼がみなす政治家）によって破壊されたという強烈な被害者意識と、奪われた人生への怒りが犯行の原動力となっていた6。

5.2 拡大自殺（Extended Suicide）と「疑似コマンド」

多くの「無敵の人」による事件は、犯罪学的には「拡大自殺（Extended Suicide）」あるいは「自殺的大量殺人（Suicide-Mass Murder）」として分類される7。

犯人の最終的な目的は、逃亡して利益を享受することではなく、現場での自殺、あるいは警察による射殺（Suicide by Cop）、もしくは死刑による処刑である。彼らにとって殺人は、自身の死を「意味あるもの」にするための演出、あるいは道連れを確保するための手段である。

精神科医のPaul Mullenは、こうした犯人を「疑似コマンド（Pseudo-Commandos）」と呼び、彼らが武器を携行し、武装した兵士のような心境で「社会」という敵に対する最後の特攻を行う心理状態を描写している41。

自殺が「内向的な攻撃」であるのに対し、拡大自殺は「外向化された攻撃」である。自己に向けられるべき絶望や破壊衝動が、ある閾値（Tipping Point）を超えた時、あるいは自己愛的な防衛機制が働いた時、それは外部の対象へと向きを変える43。

特徴	自殺 (Suicide)	拡大自殺 (Extended Suicide) / 無敵の人
攻撃の方向	内向（自己破壊）	外向（他者破壊＋自己破壊）
動機	絶望、自責、逃避	絶望、他責、復讐、承認欲求
社会との関係	断絶による孤立感	断絶による敵対感
心理的背景	うつ、無価値感	剥奪された特権意識、ナルシシズムの傷つき

結論と政策的含意：排除から包摂へ

本報告書の分析から明らかになったのは、「無敵の人」という現象が、個人の病理であると同時に、社会構造の病理であるという事実である。社会的絆の断絶（統制理論）、達成手段の閉塞（緊張理論）、相対的剥奪感の増大、そして一度レールを外れると再起不能な「損失領域」への固定化（プロスペクト理論）が、生物学的な攻撃衝動（進化心理学）と結びついた時、人間は「無敵」の破壊者へと変貌する。

政策的含意と対策

- 1. 「失うもの」の回復（Stake in Conformityの再構築）：
プロスペクト理論が示す通り、損失領域にいる人間はリスク愛好的になる。したがって、

最も有効な対策は、彼らを「利得領域」あるいは「現状維持領域」へと引き戻すことである。ベーシックインカム（BI）や最低生活保障の充実は、単なる救済ではなく、彼らに「失いたくない生活基盤」を与えることで、法遵守のインセンティブ（抑止力）を回復させる安全保障政策として機能する¹。

2. 「居場所（Ibasho）」の創出と社会的絆の修復：

ハーシの理論が示す通り、愛着と関与の回復が不可欠である。就労支援一辺倒ではなく、趣味やコミュニティへの参加など、評価や競争に晒されない「第三の居場所」を提供し、孤独を解消することが、他者への共感性を回復させる鍵となる。

3. 「自己責任論」の緩和と名誉の回復：

「剥奪された特権意識」を緩和するためには、彼らの苦境を個人の怠慢として断罪するのではなく、構造的な問題として認め、社会的な尊厳（名誉）を回復させるナラティブが必要である。社会からの承認が得られれば、承認を求めて凶行に走る「クレイジー・バスタード」的なシグナリングの必要性は低減する。

4. メディア報道の抑制：

拡大自殺を企図する者は、死後の「悪名」を求めているケースが多い。メディアが犯人を「モンスター」としてセンセーショナルに扱い、その主張を拡散することは、彼らの自己顕示欲を満たし、次なる「無敵の人」を生み出す誘因となる（メディア・コンテージョン効果）³⁸。報道においては、犯人の英雄化や神格化を徹底して避ける倫理規定が求められる。

「無敵の人」とは、社会が生み出した「何も持たざる者」たちの逆襲である。彼らを物理的に排除しようとするほど、彼らはより「無敵」になり、その刃は社会の最も脆弱な部分へと向けられる。真の対策は、彼らを再び「社会というゲーム」のプレイヤーとして迎え入れ、「失うことが怖い」と思えるような何かを手にしにさせることに他ならない。

参考文献（Citation Integration）

本報告書における記述は、以下の資料および学術的知見に基づいている：1（ひろゆきによる定義、就職氷河期世代の文脈）、3（ハーシの社会的絆理論、統制理論）、10（アグニューの一般緊張理論）、12（相対的剥奪感、ルサンチマン）、16（プロスペクト理論、価値関数）、23（クレイジー・バスタード仮説）、27（若年男性症候群）、23（絶望の閾値モデル）、38（剥奪された特権意識）、7（拡大自殺）、41（疑似コマンド、アモック）。

引用文献

1. 無敵の人（インターネットスラング） - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%84%A1%E6%95%B5%E3%81%AE%E4%BA%BA%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%8D%E3%83%83%E3%83%88%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B0>
2. ANNUAL REVIEW 2023-2024 - Queen's University Belfast, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.qub.ac.uk/Research/GRI/mitchell-institute/FileStore/Annual%20Review%202023-24%20-%20Web%20Version.pdf>
3. Why good people sometimes do bad things: 52 reflections on ethics at work -

- KPMG agentic corporate services, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://assets.kpmg.com/content/dam/kpmg/pdf/2016/04/why-good-people-sometimes-do-bad-things.pdf>
4. (PDF) crime and guilt - ResearchGate, 12月 18, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/394263814_crime_and_guilt
 5. CRIMINOLOGY: Explaining Crime and Its Context, Seventh Edition - Oujda Library Books, 12月 18, 2025にアクセス、
[https://cdn.oujdalibrary.com/books/754/754-criminology-explaining-crime-and-its-context-\(www.tawcer.com\).pdf](https://cdn.oujdalibrary.com/books/754/754-criminology-explaining-crime-and-its-context-(www.tawcer.com).pdf)
 6. Cults, Violence, and the Politics of Victimhood in Japan - Queen's University Belfast, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.qub.ac.uk/Research/GRI/mitchell-institute/ResearchandImpact/Blogs/CultsViolenceandthePoliticsofVictimhoodinJapan.html>
 7. Utility of homicide-suicide constructs in forensic psychiatry - Psychiatria Polska, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.psychiatriapolska.pl/pdf-130530-82752?filename=82752.pdf>
 8. R dissertation_4-23-07 - NC State Repository, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://repository.lib.ncsu.edu/bitstreams/7e5025ca-8e7a-4779-beba-91ca8be06875/download>
 9. Full article: Strain theory, resilience, and far-right extremism: the impact of gender, life experiences and the internet, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/17539153.2022.2031137>
 10. Exploring the Intersection of Masculinity, Mental Health, and Mass Shootings - ScholarWorks@UARK, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://scholarworks.uark.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=6902&context=etd>
 11. Strain and the School Shooter: A Theoretical Approach to the Offender's Perspective - Encompass - Eastern Kentucky University, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://encompass.eku.edu/etd/410/>
 12. PERCEIVED RELATIVE DEPRIVATION AS A CAUSE OF PROPERTY CRIME, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.ojp.gov/ncjrs/virtual-library/abstracts/perceived-relative-deprivation-cause-property-crime>
 13. Why is violence high and persistent in deprived communities? A formal model - Journals, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://royalsocietypublishing.org/rspb/article/290/1993/20222095/79615/Why-is-violence-high-and-persistent-in-deprived>
 14. "Today I Die like Jesus Christ" : An Analysis of Ressentiment in Perceptions, Motivations and Justifications of Violent Extremist Manifestos Capelos, T - Helda - Helsinki.fi, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://helda.helsinki.fi/server/api/core/bitstreams/596b4aa4-52d9-4255-a4e2-c7e283a9fc24/content>
 15. From Ressentiment to Resentment as a Tertiary Emotion - Semantic Scholar, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://pdfs.semanticscholar.org/64b0/99672c38841f5133754191885b83e33121ce.pdf>

16. How Do Criminals Make Decisions? - RK, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://rklymentiev.com/post/how-do-criminals-make-decisions/>
17. Offender Decision-Making in Criminology: Contributions from Behavioral Economics, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.ius.uzh.ch/dam/jcr:04873c8b-026a-4683-8623-edf9be2eb02f/Pogarsky%20et%20al.%20-%20Decision%20Making.pdf>
18. Are Suspects Who Resist Arrest Defiant, Desperate, or Disoriented? - Penn State, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://pure.psu.edu/en/publications/are-suspects-who-resist-arrest-defiant-desperate-or-disoriented/>
19. Prospect Theory and Higher Moments - DiVA portal, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.diva-portal.org/smash/get/diva2:111168/FULLTEXT01.pdf>
20. Risk Isn't Irrational When You're Desperate | by Dthinking2025 | Medium, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://medium.com/@deqiang.hu/risk-isnt-irrational-when-you-re-desperate-1542b20102cb>
21. Prospect Theory and Criminal Choice: Experiments Testing Framing, Reference Dependence, and Decision Weights - ResearchGate, 12月 18, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/327885426_Prospect_Theory_and_Criminal_Choice_Experiments_Testing_Framing_Reference_Dependence_and_Decision_Weights
22. (PDF) Prospect theory and risk-taking behavior: an empirical investigation of Islamic and conventional banks - ResearchGate, 12月 18, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/351064184_Prospect_theory_and_risk-taking_behavior_an_empirical_investigation_of_Islamic_and_conventional_banks
23. Foundations of the Crazy Bastard Hypothesis: Nonviolent physical risk-taking enhances conceptualized formidability | Request PDF - ResearchGate, 12月 18, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/259143355_Foundations_of_the_Crazy_Bastard_Hypothesis_Nonviolent_physical_risk-taking_enhances_conceptualized_formidability
24. Why do inequality and deprivation produce high crime and low trust - SciSpace, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://scispace.com/pdf/why-do-inequality-and-deprivation-produce-high-crime-and-low-57d40dqzeh.pdf>
25. (PDF) Explaining the paradoxical effects of poverty on decision making: The Desperation Threshold Model - ResearchGate, 12月 18, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/389953984_Explaining_the_paradoxical_effects_of_poverty_on_decision_making_The_Desperation_Threshold_Model
26. Why is violence high and persistent in deprived communities? A formal model - PMC, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC9943638/>
27. Risk-Taking Behavior (Young Male Syndrome) - ResearchGate, 12月 18, 2025にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/323813300_Risk-Taking_Behavior_Young_Male_Syndrome

[g_Male_Syndrome](#)

28. Competitiveness, Risk Taking, and Violence: The Young Male Syndrome - Martin Daly, 12月 18, 2025にアクセス、
https://www.martindaly.ca/uploads/2/3/7/0/23707972/wilson_daly_1985_young_male_syndrome.pdf
29. The Young Male Syndrome—An Analysis of Sex, Age, Risk Taking and Mortality in Patients With Severe Traumatic Brain Injuries - PMC, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC6473461/>
30. The baby effect and young male syndrome: social influences on cooperative risk-taking in women and men - University of Warwick, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://warwick.ac.uk/fac/sci/psych/people/thills/thills/fischerhillsehb2012.pdf>
31. Competitiveness, risk taking, and violence: the young male syndrome - ScienceOpen, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.scienceopen.com/document?vid=ef347e52-a26c-4fc9-81ce-3cfb5d3c9109>
32. Sizing up Helen - AKJournals, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://akjournals.com/downloadpdf/journals/1126/12/2-4/article-p67.pdf>
33. Associations between relative formidability and pain sensitivity in three U.S. online studies - University of Michigan, 12月 18, 2025にアクセス、
https://sites.lsa.umich.edu/esplab/wp-content/uploads/sites/168/2023/02/Fessler_Pain-and-formidability2023.pdf
34. Poverty Power White Collar Crime and the Paradoxes of Criminological Theory* | John Braithwaite, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://johnbraithwaite.com/wp-content/uploads/2016/03/Poverty%20Power%20White%20Collar%20Crime%20and%20the%20Paradoxes%20of%20Criminological%20Theory.pdf>
35. Dominance and Aggression in Humans and Other Animals: The Great Game of Life 9780128053720, 0128053720 - DOKUMEN.PUB, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://dokumen.pub/dominance-and-aggression-in-humans-and-other-animals-the-great-game-of-life-9780128053720-0128053720.html>
36. On the Inappropriate Use of the Naturalistic Fallacy in Evolutionary Psychology. Biology and Philosophy. - bingweb - Binghamton University, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://bingweb.binghamton.edu/~dietrich/Papers/EvolutionaryPsy/WrongUseofNatFallacy.pdf>
37. Why are small males aggressive? - PMC - NIH, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC1564107/>
38. Mass Shootings and the Media Contagion Effect Jennifer Johnston, Ph.D. and Andrew Joy, BS Western New Mexico University, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.apa.org/news/press/releases/2016/08/media-contagion-effect.pdf>
39. Masculinity, aggrieved entitlement, and violence: considering the Isla Vista mass shooting - CECT Resource Library |, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://cectresourcelibrary.info/wp-content/uploads/2021/07/Masculinityaggrievedentitlementandviolenceconsideringthelavistamassshooting.pdf>
40. Extended Suicide Attempt: Psychopathology, Personality and Risk Factors, 12月 18,

- 2025にアクセス、 <https://www.karger.com/Article/Pdf/29111>
41. Running Amok - The Guardian Bookshop, 12月 18, 2025にアクセス、
<https://guardianbookshop.com/running-amok-9781917569002/>
42. [PDF] Running Amok by Paul E. Mullen | 9781917569019 - Perlego, 12月 18, 2025に
アクセス、
[https://www.perlego.com/book/5262573/running-amok-inside-the-mind-of-the-l
one-mass-killer-pdf](https://www.perlego.com/book/5262573/running-amok-inside-the-mind-of-the-l-one-mass-killer-pdf)
43. Frequently Asked Questions About Suicide - National Institute of Mental Health
(NIMH), 12月 18, 2025にアクセス、
<https://www.nimh.nih.gov/health/publications/suicide-faq>
44. (PDF) Murder-suicide: Bridging the gap between mass murder, amok, and suicide,
12月 18, 2025にアクセス、
[https://www.researchgate.net/publication/279161473_Murder-suicide_Bridging_th
e_gap_between_mass_murder_amok_and_suicide](https://www.researchgate.net/publication/279161473_Murder-suicide_Bridging_the_gap_between_mass_murder_amok_and_suicide)